

【7月の気象】

月の前半は、梅雨の末期にあたり、前線の活動が活発化して大雨となることがあります。

梅雨期に台風が近づくと、台風が運んでくる暖かく湿った空気により梅雨前線の活動がさらに活発化するため、大雨災害への警戒が特に必要となります。月の後半は、梅雨明けの時期にあたり、四国地方における梅雨明けの平年は7月17日ごろです。梅雨明け後は太平洋高気圧に覆われ、晴れて暑い日が続くことがありますので、熱中症や農作物の管理に注意が必要です。

気象庁と環境省は、熱中症の危険性が極めて高い暑熱環境が予測される場合に、暑さへの「気づき」を呼びかけ国民の熱中症予防行動を効果的に促す「熱中症警戒アラート」について、令和4年4月27日(水)から10月26日(水)までの間、運用を行いますので熱中症予防にご利用ください。

気象庁ウェブサイトにおける熱中症警戒アラートのページアドレス

<https://www.jma.go.jp/bosai/map.html#element=heat&contents=information>

【気象用語】「温室効果」とは

地球の大気には二酸化炭素などの温室効果ガスと呼ばれる気体がわずかに含まれており、これらの気体は赤外線を吸収し、再び放出する性質があります。この性質のため、太陽からの光で暖められた地球の表面から地球の外に向かう赤外線の多くが、熱として大気に蓄積され、再び地球の表面に戻ってきます。この戻ってきた赤外線が、地球の表面付近の大気を暖めます。これを温室効果と呼びます。温室効果が無い場合の地球の表面の温度は氷点下19℃と見積もられていますが、温室効果のために現在の世界の平均気温はおおよそ14℃となっています。大気中の温室効果ガスが増えると温室効果が強まり、地球の表面の気温が高くなります。

20世紀半ば以降に見られる地球規模の気温の上昇、すなわち現在問題となっている地球温暖化の支配的な原因は、人間活動による温室効果ガスの増加である可能性が極めて高いと考えられています。18世紀半ばの産業革命の開始以降、人間活動による化石燃料の使用や森林の減少などにより、大気中の温室効果ガスの濃度は急激に増加しました。この急激に増加した温室効果ガスにより、大気の温室効果が強まったことが、地球温暖化の原因と考えられています。



温室効果の模式図



現代社会はたくさんの化石燃料を消費し、大量の温室効果ガスを排出しています。